

島からの手紙

神野麻郎

室木港からは小さな連絡船に乗る。沖に出ると海は青く澄んで光を帯び、左右の島影が生き物のようにしだいに移っていく。スヨンは学生時代に友だちと気ままに旅行した、母国の南海地方の海を思い出した。何年も前だが、あの時の船もたくさん島の間を縫っていくようで、海がなめらかに光っていた。

朝、前夜泊まった福岡を立ち、関門海峡を渡って徳山、徳山から光、光から室木と、乗り物を取り換えるたびに風景はどんどんひなびていった。スヨンは東京や京都には国際学会への参加で訪れたことがあるが、都会でなく、母国にもよくありそうな日本の田舎らしい景色の中にゆっくり身を置くのは初めてだった。その景色は、この国にかつて過ぎていった昔の時間を連想させた。ハルモニも生きた時間を。

連絡船は高い機関音をひびかせながら飛ぶように走る。船室の椅子に坐っている数人の乗客は、島の人や工事関係の人のようだ。中に、スーツケースを足もとに置き、厚いコートをとったスヨンをちらちらと見てくる視線もある。すぐ前の老人二人が話している言葉がまったくわからない。福岡のターミナルや新幹線の中ではまだ母国の言葉を目や耳にしたが、その後はもう、風景の親和感とは反対に言葉の不明な世界だ。目にする看板や漢字の表示もよくわからなかった。それで、自分と世界との間に見えない膜ができてしまったようなたよりない気分になった。でも、とスヨンは思い返す。私はハルモニの島に行くのだから。昔ハルモニもこうしてバスや連絡船に乗ってこの道を行き来したのにちがいないのだから。

外気にふれようと後方のデッキに出てみた。スクリューの巻く波が後ろに盛り上がり、左右に広がる白波は急いで後ずさっていく。でも沖に出ても海はずっとおだやかで、もう春らしい日差しがその色を深めている。前方に、それまでは平らに細長く見えていた島がだんだん高くなり、ふところを開いていく。

船は三度汽笛を鳴らした後は機関音を低めて、漁船もたくさん泊まっている小さな港に接岸した。栈橋では頭に手拭いをしたおばさんや帽子の男が数人、リヤカーやネコ車をそばにして待っていた。栈橋との間に短いタラップが渡され、スヨンは乗客の最後に渡った。足が栈橋に落ち着くと、まず目を閉じて深呼吸をした。そして目を開くと、挨拶のように初めて見る景色が飛び込んできた。意外に高くまでせり上がっている緑の斜面、それらのすそにへばりついているようなくすんだ色の集落。

宿は予約していなかった。ネットのページで島には旅館が二軒あることはわかったが、ふだん利用している旅行業者には地方の小さな旅館は扱っていないので断られ

てしまったし、自分の日本語力では直接そこに電話してみる勇氣は出なかった。ハルモニの島なのだ、飛び込みで何とかなるだろうと思っていた。学生時代にも一人でそんな行き当たりばったりの旅をしたことがある。

その一軒は港の奥の方で看板が目立った。スヨンはガラス戸の開いている玄関に入って「コンニチハ」と声をかけてみたが応答がない。もう一度声を高めると、やっと奥の方で人の気配がして、女将らしい小太りの年配のおばさんが「はい、はい」と出てきた。スヨンは、「キョウ、イッパク、デキマスカ？」と指を一本立てながら、さつき暗記したばかりの日本語で言ってみた。女将は表情をくずしながら、「ええ、できますよ。どうぞ」と中に招いた。

黒光りしている階段を上って二階の和室に通されると、道に面していて、窓から港が望めた。ポットの湯を運んできたおばさんが早口で何か言ったが、スヨンはまったくわからず、笑顔を作って、「ワタシ、ニホンゴ、ワカリマセン」と返した。「ああ？」と女将はスヨンの顔をまじまじと見直して、また何かしゃべった。どこから来たのか、と言われたような気がしたので、「ワタシ、カンコクカラ、キマシタ。ヨロシクオネガイシマス」と軽く頭を下げた。女将はちよつと驚いたようだったが、大きくうなずいて笑顔をつくった。それからは身振り手振りも交えて女将が伝えようとしたのは、食事や風呂のことだった。

夕食までに間があつたので、スヨンは軽装で散歩に出た。小家の密集する狭い集落で道も狭く、自動車は一台も見ない。見かけるのは老人や猫ばかりで、雨戸を閉め切つた家や壊れかけた家も多かつた。路地を歩きながらスヨンはなんとなく診療所を探したが、すぐには見当たらなかつた。奥まつた山際に小学校があつて、運動場で数人の子供たちがサッカーボールを追いかけていた。その隣の小高い所には母国にもあるような仏教寺院の屋根が見えた。道に導かれるままに傾斜を登っていくと人家が尽きて、左右に柑橘類を植えた畑が広がつた。春先なので実はなかつたが、常緑の葉はてらてらと光を含んでいる。畑の端に立つて来た方を振り返ると下方に港が望め、海の向こうにはなだらかな山並みと町がかすんでいた。深い息をつきながら、とうとうハルモニの島に来たんだ、とスヨンはあらためて思った。ハルモニの古い手紙の一節が思い出された。

《スヨンちゃん……ここは騒がしいソウルとちがつて静かな住みよい所です。島の人は皆やさしく、ハルモニを大事にしてくれます。友だちもできましたよ。食べ物野菜も魚もおいしいし、田舎だけど不便はあまりありません。海の景色がほんとうにきれい。ハルモニは来てよかつたと思つています。スヨンちゃんがもう少し大きくなつたら、ぜひ連れてきて見せてあげたい》

《スヨンちゃん…日本の国は今、大都市を中心に経済が繁栄しているようですが、この島の人たちはつつましく暮らしています。島の主な産業は漁業と蜜柑の栽培です。五月ごろに蜜柑の白い花が咲くと、島じゅうが甘い香りに包まれるのですよ。でもじつは、急傾斜の畑での蜜柑栽培は重労働、島の老人たちはそのためのだいたい足腰を痛めています。ハルモニの患者さんにはそういうお年寄りが多いのですよ》

ハルモニは折々、この島から、ソウルの家族に宛てて手紙をくれた。その中にならずスヨンに宛てた一枚があった。短いものだが、いつも「スヨンちゃん」と呼びかけから始まっていて、子供のスヨンは幼いころに親しんだハルモニの顔や声をようやく思い浮かべながら熱心にくり返し読んだものだ。たまに自身の写った写真も同封されていた。初等学校生のスヨンも、親に教わりながら熱意をこめて手紙を書いた。かわいいうイラストを添えた。スヨンからの手紙が何より楽しみだとハルモニは書いてきた。

「ハルモニ！」とスヨンは虚空に向かって声を出して呼びかけた。

「ハルモニ、トウディオ、ネガヨギエワツソヨ（どうとう私、ここに来ました）！」

問いかけたことがいくつもあった。

「ハルモニ、イエジヨネ、ウエイイロンモルリゴカジ、ホンジャソワツソットン（昔、どうしてこんな遠くにまで一人で来たの）？ ウエロプチアナツソヨ（寂しくなかったの）？」

手紙を交わしていた子供のころはあまり思わなかったが、大人になるにつれ、スヨンは折々ハルモニの人生について考えるようになった。いくつもの疑問がわいた。暗い苛酷な植民地時代に生まれたハルモニは、ずいぶん苦勞しながら育ったのではないか。勉強がよくできて東京の医学の専門学校にたった一人で留学したときにはどんな思いだったか。日本で暮らしながらひどい差別や侮辱を受けなかったのか。長く続いた戦争や内戦中はどんなふうにも暮らし、母国や日本をどう思っていたのか。また戦時中のハラボジとの結婚、ハラボジが早く亡くなってしまい、子育てしながら一人で医院をがんばって続けた苦勞、そして年を取ってから日本に、それもゆかりもなかった辺鄙な小島にたった一人で赴いた理由。

もうそれらのことをハルモニに訊くことはできなかった。記憶と、手もとにいくつが残された古い手紙の文章だけが頼りだった。その田舎の小さな島が目の前に、足の下にあった。

スヨンはまたハルモニに、自分のことも問いかけてみたかった。

「ハルモニ、ネガオツトツケハミョンチョアヨ（私、どうしたらいいの）？」

このごろのスヨンは二つのことを悩み迷っていた。一つは恋愛、結婚。学生時代からつき合ってきた彼とはこのごろ感情の行き違いが多くなってしまう。一方アルバイト先の病院の好もしく思っている医師からは突然求婚され、気持ち揺らいでいた。もう一つは研究、仕事。医師であったハルモニやハラボジの影響もあつてか、今まで大学、大学院と薬学の勉強を続けてきた。去年博士号も取れたが、そのまま大学に残って研究職をめざすべきか、それとも今声をかけてくれている民間企業に就職するべきか。スヨンの中でそれら二つのことは絡み合っ一つのようなふうでもあつた。一つが決まると、他も決められるような気がした。でも決めかね、迷い、煮詰まったようになって、休暇をとってソウルを飛び出してきたのだった。

旅館に戻ったのは日暮れ近かった。女将に言われるままに階下の部屋で食事をすまし、風呂にも入って二階の部屋でくつろいでいると、携帯に母から電話があつた。そんな言葉もわからない所に一人で行って、と母は怒るような心配するような調子だった。母は日本という国が好きではない。彼からも一つ、案ずるメールが入っていた。離れている距離のせいなのかいつもより遠くの人に感じた。どちらも短く応答し終わると、二人の顔はすぐ遠ざかった。窓を開けると、潮の香の混じった、ソウルよりは少し暖かい春の宵の空気が入ってきた。

廊下で女将の声がして、ガラス戸が開いた。女将の後ろにもう一人いた。女将がなにか言うがやはりわからない。でもそのいつしよに来た三十代後半くらいに見える人が、「アンニョンハセヨ」と言って笑いかけた。そしてゆっくりだがよくわかる韓国語で、韓国からお客さんが来て、言葉がわからないから、ちよつとしやべつてやってくれないかとおばさんに言われたから来てみた、と説明した。スヨンは顔を輝かせた。二人の親切がありがたく、「アリガトウゴザイマス」とくり返した。島に来てみて、ハルモニのことについて聞きたいこと、知りたいことがいっぱいあつた。でもなかばあきらめかけていたのだ。

ナミさんという名前のその人は、両親とも日本に住む韓国人で大阪で生まれ育った、縁あつてこの島の漁師と結婚した、子供ももう小さいのが二人いる、としゃべった。日に焼けて、屈託なさそうなナミさんに、スヨンは一気に自分の事情を話した。ソウル以来自分の中に溜まっていた言葉が堰を切ったようだった。ハルモニの跡を尋ねてここまで来たこと、ハルモニは医者でソウルで開業していたが、二十五年ほど前にこの島の診療所にやってきて八年間ほど住んだこと、そしてこの島で亡くなったこと、ハルモニがここでどんなふうに暮らしていたのか、親しかった人がいたらできれば聞いてみたいこと……。ナミさんは一々うなずきながら笑顔で聞いてくれた。そして、私は八年ばかり前にここに来たのであなたのハルモニのことは知らないが、近所の人

に聞いてあげよう。あなたの気持ちは私にもわかる。私も濟州島にハラボジやハルモニがいて、一度訪ねて行きたかったけれど、行かないうちに二人とも亡くなってしまった。でも濟州島はいつか訪ねたいと思ってる。だからあなたの気持ちはよくわかる。そう、明日の朝、子供を学校と保育所に送り出したら私、来るからね、待っていないさ、と言ってくれた。宿の女将さんも事情がわかって、まあ、あのミリ先生のお孫さんかね、と驚いてスヨンを見直し、ミリ先生ならよく知っているとなつかしがってくれた。

その夜興奮してなかなか寝つけない中で、スヨンはナミさんと宿の女将に感謝し、そしてきつとハルモニが見守ってくれ、うまく導いてくれたのだと思った。夜の静けさの中に、港の岸壁にたゆたう波のやわらかな音だけがわずかに聞こえた。

夜の間雨が通ったようで、朝起きて窓からのぞくと道が濡れていた。その雨雲がまだ奥の方に居残っているようで、空は灰色だった。

朝と言っていたが、ナミさんが来たのはもう十一時に近かった。でもその間ナミさんはスヨンのためにあちこちに聞き合わせてくれていたらしい。会うとすぐ、まずあなたのハルモニが暮らしていた家に行きましようとしてスヨンを促して、二人は宿を出た。狭い路地を右に曲がり左に曲がって行くと、やがて壁のクリーム色はげかかった建物の前に出た。入口に黒ずんだ看板がかかっていて、島の診療所だという。その前に白髪のおばあさんが二人待っていて、ナミさんが紹介してくれた。ミリさんと仲よくつき合ったというキヌコさんとタキヨさんだという。スヨンは頭を下げた。どちらからともなく手を取りあった。二人はスヨンを見てたがいに顔を見合わせて何か言った。ミリさんによく似ている、あなたのほうがずっと美人だけどと言っている、とナミさんが笑いながら通訳してくれた。

診療所は今常駐の医師がおらず、週に二回本土から医師が巡回してくる時に使うそうだ。でも、鍵を預かっているから中に入って、とナミさんがドアを開けてくれた。一階が診療所で待合室にはカバーにつき当てるある長椅子が二つ並んでいたが、ミリがいた時代は待合室は診てもらう人もそうではない人も集まってきて話に花を咲かせ、朝も昼もにぎわっていたのだという。先生はきれいな標準語をしゃべった、いつもニコニコして患者を励ましてくれたし、病気以外の相談にも乗ってくれた、今はもう亡くなった人も多いが、ここに来て先生に会うだけで元気になれるという年寄りたちもいた、と二人はなつかしげに話すのだった。

診療所の隣に壁を一つ隔てて畳の部屋と台所が隣接していた。ミリは島にいた間、そこで自炊していたという。島の人がよく魚や野菜や果物を届けたそうだ。それを診療費代わりにしていた人もいた。ミリは貧しい人からはお金を取らなかったという。

狭いぎしぎし鳴る階段を昇って二階の部屋にも案内された。そこはミリの自室だっ

たそうだ。小柄なほうのキヌコさんが、先生の生活ぶりはそりゃあきちんとしていなさった、朝は暗いうちに起きて聖書を読んでお祈りをして、それから散歩するのが日課、暇があるとこの部屋で本を読んだり、テレビを見て勉強したり。あんまり暇な時は私ら仲のよいのがここに集まって先生も入って花札やランプもしたよ、と言って笑った。大柄なほうのタキヨさんもうなずいて、そうそう、先生はソウルから手紙が届くの何より楽しみにしていたよ、海がしけるとね、連絡船が欠航になって手紙がなかなか届かんのを残念がっていたよ。スヨンは、この小部屋で寝起きし、ソウルの家族を思い、手紙を書き、自分の手紙を喜んで読んでいるハルモニの姿を思い浮かべると涙がにじんできた。

二人のおばあさんは、ミリが倒れた日のことも教えてくれた。朝、先生が二階から下りて来ないので人が見に行ったら、倒れていた。もう息がなかった。急いで漁船で町の病院に運んだが、いけんかった。心筋梗塞だったと聞いたよ。スヨンはその後のことを憶えている。父と叔父が急いでソウルを立ち、三日後にハルモニの遺骨を持って帰ってきた。親族が集まって葬儀をした。その時スヨンは中学生だった。

島にもミリの墓があるというので、スヨンは驚かされた。ミリは、もし自分がここで死ぬようなことがあったら、骨を一部分けてできれば島のどこか海が見える所に埋めてほしい、と親しい人に頼んでいたらしい。その時ミリはもう自分の寿命をさどっていたのかもしれない。墓の件はいちおう町会に諮られたが、反対する者は誰もいなかったという。皆でその墓に行ってみると、その場所は昨日スヨンが歩いた蜜柑畑の近くだった。小ぶりの日本式の墓石に漢字でミリの名前が刻まれていた。ソウルの方を向けて建てたのだという。海から来る風が冷たかったが空は明るくなっていた。

二人のおばあさんに礼を言って別れた後、ナミさんが、何もなければウチで昼食を食べていきなさいと誘ってくれた。行ってみるとナミさんの家は漁家にしてはカラフルで、庭には芝生を敷き、ブランコもあった。古家を壊して新築する時、一生住むところだからと二人で家や庭のデザインを考えたのだという。それでも石垣の上にはウエットスーツや漁具が載っていた。ナミさんの夫は漁に出ていた。家の中も町の家のように明るい感じに作られていて、おもちゃの類がたくさんあった。

ご飯をいただきながら、スヨンは思い切つて来てよかったとナミさんに言った。やっとハルモニに会えました、というそばから、顔は笑っているのに涙がこぼれた。ナミさんはなぐさめてくれた。ミリ先生は立派なやさしい方だったんだねえ。こんな不便な島に遠くから来て住みつき、島の人に尽くしてくれたんだねえ。

食べ終わったころ、さっきのキヌコさんが杖をつきながらやって来て、ほかにもあなたに会いたいという島の人がいるから、ご飯がすんだら来てくれないか、集会所に集まっているからと言った。スヨンとナミさんはすぐ家を出た。

集会所の畳の部屋ではもう老人数人が車座になっていた。タキヨさんもいて、皆を紹介してくれた。ナミさんの通訳によると、皆ミリの患者や親しかった人たちだという。中で元町会長だったという一人の小柄なごましお頭のお爺さんが坐り直してスヨンに向かって改めて頭を下げ、長い挨拶のように何か言いはじめた。ところどころで、回りの人の合いの手が入ったが、ナミさんによるとだいたいこんなことを語ってくれたらしい。

「ミリ先生が島に来てくださったのは、ちょうど自分が町会長をしているところだった。当時前の先生が去った後、島に来てくれるお医者さんがなくて困っていたところへ、先生が手をあげてはるばる韓国から来てくださったので、島にとって大変ありがたかった。でも初めは心配もした。韓国の大都會のソウルから日本のこんな辺地の小島に来て、先生は医療をするのに言葉はだいたいどうぶなのか、田舎暮らしになじめるのか、来てもすぐに帰ってしまわれるのではないか、などと心配したものだ。でも先生は、戦前東京の女子医専を卒業しておられて日本語はなんの不自由もない、日本の暮らしもよく知っておられるとわかった。それで我々も安心した。

三年の契約だったが、島の人たちの評判がよく、先生も島の暮らしを気に入ってくださったので、結局契約を二回更新させていただいた。辺地医療に先生は深い慈愛の心をもって尽くしてくださった。今はこの島も老人ばかりの寂しい島になってしまったが、先生がおられたところは人口もまだ多くて、若い者も子供たちもたくさんいて、病気や怪我の時は皆が先生を頼りにしたものだ。そればかりでなく、温かいお人柄で島びとの心の悩みにも寄り添ってくださり、あんな方は他にいなかった。まだまだそんなお歳ではなかったのに、突然亡くなられたのは大変惜しい、悲しいことだった」。そして元町会長は携えていた一冊の本を開いた。ナミさんの説明によるとそれはそのころ作られた島誌で、「医療・健康」の「診療所」の項目のところに白衣を着て診察室で患者を診ているミリの白黒の写真が載り、ミリを紹介する文章もあった。写真では、ミリも患者もそばの看護師も楽しそうに笑っていた。スヨンは老人の好意に心から感謝した。

同じようにアルバムを携えている人もいて、ミリが島の人たちといっしょに写っている数枚を見ると皆が声を挙げた。全町運動会や正月行事の折の写真もあった。スヨンの耳にも周りの人の「センセイ」、「ナツカシイ」などの言葉が聞き分けられた。胸を熱くして一枚一枚に見入りながら、スヨンはこの島でのホルモニの幸福を思った。もちろん一人で故国を離れてきたミリは、痛切に孤独を感じることもあっただろう。子供に語りかける手紙のおだやかな調子とはちがって、島の人たちの医療に責任をもつ仕事では医師としての苦労や悩みも多かったにちがいない、と今のスヨンには容易に推測がつく。が、また、医術と人柄が島の人たちに迎え入れられたという幸せもミ

リにはあったのだ。

話に花が咲いて、一時間余りはすぐに過ぎた。でもスヨンは午後の連絡船でもう島を立たなければならなかった。事情を言って、別れを惜しみながらそこを辞去した。

もう一度一人でハルモニの墓に行ってみた。途中の道端で摘んだ黄色の野の花を供えた。目を閉じて合掌していると、目の前にハルモニの姿が浮かぶようだった。子供のころに見た笑顔だった。おのずと、さつきナミさんを通じて聞いた島の人たちのたくさんの言葉を反芻した。笑顔のハルモニがなにか言ってくれそうだった。また手紙の一節が思い出された。

《スヨンちゃん。……もう中学生になったのですね。おめでとう。そしてかわいい写真をありがとう。制服がよく似合いますね。こないだ孫に恵まれて、ハルモニは幸せです。……スヨンちゃんももうすぐ大人になりますね。若いころからのことを思うと、ハルモニの時代は苦労が多かったけれど、今は私たちの時代とちがって、食べ物に不自由せず、自由に進路も選べるのだから、しっかりと勉強して立派な大人になってください。そしてスヨンちゃん、勉強ばかりでなく、人を愛することをおぼえなさい。そのためにはまず自分を愛しなさい。そしてまわりの人を愛しなさい。長い年数を生きてきて、人としていちばん大事なのはそういうことだと、ハルモニはほんとうにそう思っています。》

《スヨンちゃん。……ハルモニはこの島の診療所にもう何年も勤めています。誰も知らない所へ思い切って来てみたのですが、ほんとうに来てよかったと思っています。後悔はありません。医者がいなくて困っている人たちを少しでも助けたいとハルモニは思ってきました。一度東京に行って、学校時代のなつかしい学友たちにも再会できました。もう一年ほどしたら、ハルモニは韓国に帰るつもりです。そして帰ったら、やはり無医の田舎のほうで巡回医療をしたいと思っています。もうハルモニも年をとったので、いつまで元気でいられるかわかりませんが、身体の続く限り続けるつもりです。》

雲が遠のいて、明るい空から海に光が降っていた。風はやはり少し冷たかったが、それでも出かけて来る時も山に雪が積もっていたソウルなどよりはだいぶ春が早く、厚いコートが不似合っていた。ハルモニは八回もこの島でこんな四季をすごしたのだとスヨンはあらためて思った。やさしげなあの人たちといっしょに。両腕を開いて何度か深呼吸をした。この島の空気をたくさん吸い込み、身体にしみこませておきたかった。

三時の連絡船に乗った。棧橋までナミさんが駆けつけてくれた。赤い服を着た小さなかわいい女の子を連れていた。土産にと乾物の包みを渡してくれながら、また来なさいねとナミさんが言った。ナミさんも濟州島にいつか行ってくださいね、行けるといいですね、とスヨンは返した。

棧橋で二人が手を振ってくれている。それも防波堤を回ると見えなくなった。羽を包むようにして島がだんだん遠ざかり、うすい霞を帯びていく。ずっと後ろのデッキに立ち、島を見つめながら、スヨンは「ハルモニ」とまた呼びかけた。ハルモニ、コマウオヨ。ハルモニの島に来てよかった。ハルモニに会えて嬉しかった。そして、おかげで、私の迷いも晴れそうです。私もハルモニのようにたくましく生きたい。努力するよ。それから愛、だね？

スヨンの耳に、何かを急くような高い機関音が急に飛び込んできた。